

回顧展 なお未知へ向かつて

ANA



モノとモノの関係、描いた部分と描かない部分の共振。従来の西洋美術の枠を超える問いを続ける美術家の李禹煥さん(86)が、自ら企画を練った大回顧展を東京の国立新美術館で開催中だ。国際的に評価される「もの派」の代表的存在の李さんは、しかし「絶えず未完成」と話すのだ。

李禹煥さん

展示室に入っただけで、2階四方ほどのガラス板に大きな石による亀裂を走らせた「関係項」シリーズの1作と出会う。1968年の初期作を再制作したものだ。

李さんは、「表現に対する一種の拒否、暴力、反発です。従来の社会体制への抵抗の時代でしたが、直接的に政治現象を表現するのは好きではなかった」と振り返りつつ、「今回、この否定性が自分の出発点で、そこから新たな次元を探ろうとしてきた」とが確認できてよかったと話した。

モノと見る人の「関係」■描かない「余白」



李禹煥さん

36年に韓国で生まれ、ソウル大学校美術大学在学中の56年、横浜に住む叔父に薬を届けるために短期間のつもりで来日した。しかし帰国しないまま日本で哲学を学び、60年代後半から創作を本格化。72年には単色の点や線の反復をさせる絵画を始め、時間性を表現した。

木や石、鉄などをほぼ手つかずのまま配するような、李さんらの「もの派」と呼ばれる表現は60年代末に登場。当初はなかなか理解されず、「コテンパンにやられた」。反論しなかったが、ある美術評論家からは「苦しいだろうが、簡単な話ではないから、あなたは我慢して作品に専念を」と言われたという。

「日本では侵入者のように言われ、韓国では逃亡者のように見られた」。こうして、李さんは欧米に出て行く。自宅は神奈川県に置きながら、

年の半分以上をフランスなどで制作する。一方で、自作やもの派について理解してもらうために文章も書き、理論的支柱になっていた。

西洋美術に触れて感じたのは、「キャンバスを自分の考えで埋め尽くす」姿勢で、それは領土を拡大する帝国主義に通じるように思えた。それに對し李さんの表現は、モノとモノ、モノと見る人との「関係」や、線や点と響き合う「余白」の存在を重視してゆく。自己や完全性より、他者や相対性への意識といえる。

欧米では、日本や韓国、中国の経済力、政治力が高まる、もの派への理解も広がっていたという。李さん自身、2011年にはニューヨークのグッゲンハイム美術館で、14年にはフランスのベルサイユ宮殿で大個展を開催した。

一方で気になるのは日本社会の現状だ。「70、80年代に比べ閉鎖的になっている。若者が海外に出たがらないと聞くし、逆に美術関係者も日本に來なくなつた。いい感覚があるのだから、もっと積極的交流して鍛えてほしい」

「AIや新しい知識が現れているが、内と外を切り結ぶ身体が存在が非常に重要で、そこから発する表現を考えては」とも語る。

それゆえ、自身の回顧展会場でも「感覚を開放してほしい」と話す。石や木、鉄板をそのまま並べた表現や石板を敷き詰めた部屋、ステンレスのアーチ、一つか二つの筆触だけで構成された余白たっぷりの絵画などが並ぶ。「僕の彫刻や絵画は概念で認識に迫るわけではない。見る人が現場に立ち、日常とは違う空間を体験してくれば」

昨年から今年にかけ、南仏の墓地で個展を開いた。「コロナ禍の時期に墓場というところで、死について考えました。現代において死は断絶の概念になっていたが、絶えず生の隣にあつて、むしろ無限につながるものだと感じた」。一方で回顧展に「僕の場合は今も揺れ動いている。絶えず、未完成という未知に向かっている」と感じたという。終わることなき制作の道が続くに違いない。そう思わせる言葉だ。(編集委員・大西若人)

▽「李禹煥」展は11月7日まで。火曜休館。12月13日から兵庫県立美術館。

自然の素材や工業用材をほぼそのまま材料とし、組み合わせる作品にした戦後日本における美術運動「もの派」を代表する美術家、李禹煥の回顧展が国立新美術館(東京・六本木)で開催中だ。日本では17年ぶり、東京では初となる。60年に及ぶ創作の軌跡を、約60点の作品でたどる。

空間を満たす無限の余白

文

化

会場は前半に主に彫刻、後半には主に絵画作品と大きく分けられているのが「風景Ⅰ」「風景Ⅱ」「風景Ⅲ」である。展示構成はほぼ李自身が手がけた。絵画と彫刻を並べての展示も考え、1968年の「韓国現代絵画」展に出たというが、李の作品は空間性が大きく作用することから、互いの作品の特性を生かすため別々の展示にしたという。



「関係項一鏡の道」(2021/2022年)の李禹煥

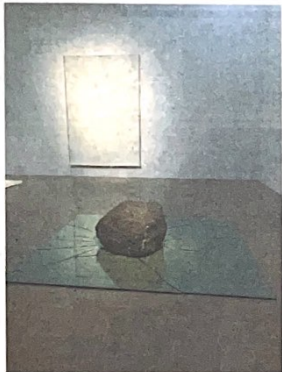
李禹煥

に作り変えている。

李の制作をたどる上で欠かせない彫刻の「関係項」シリーズも展示されている。60年代末に始まった、もの派を象徴する代表作だ。石などの自然素材と、鉄板やガラスなどの工業製品を取り合わせ、ものとの織りなす関係性に着目する。

鉄板の直方体から綿がはみ出ている作品、複数の鉄板が位置をずらし、すべり落ちそうになっている作品……。直感的に素材の特性が感じられ、剛と柔のように正反對の性質を持つものを取り合わせることでそれは「層際立つ。目を通して触れているような感覚だ。現在の世界でも高い評価を得ているもの派だが、当時は皮肉を込めた

呼称だった。李は「絵もまともに描けないから、むきだしものを放り投げて連中だと言われている」と振り返る。60年代は世界中で変革の風が吹き荒れた。日本では全共闘運動が勢いを増し、米国ではベトナム反戦運動。仏では五月革命が起きた。こうした中で、既存の価値観を打破する新しい芸術がもの派だった。李は「描くこと、作ることを拒否する。自分の創作は否定からスタートした」と語る。



「現象と知覚B 改題 関係項」(1968/2002年、写真上)と「対話ウォールペインティング」(2002年、同下)



ものとの関係性 意識

くて重い爆弾のような石で、美しいガラスをたたき割ることで暴力性を表した。最初はとにかく割ってしまえという意識で始めた」(李)

しかし、制作を重ねるごとに「もっと詩的にか、2、3カ所だけとかいうように意識が変化していった」(李)という。

次第に制作者の存在は抑えられ、作品は余白を伴った静けさをたたえるようになる。李は「最初は全然分からなかったことが、回数を重ね、磨き上げられた個性として作品に出てきた」と話す。

変化は絵画においても見られる。70年代の「点より」「線より」のシリーズでは、岩絵の具で規則的に点や線を描いた。次第に薄れていく色の濃淡や機械的な反復で描く行為によって時間の経過の表現に挑んだ。

90年代に入り手がけた「照応」シリーズでは、ストロークは短く簡潔になる。その後の「対話」シリーズでは、筆触は極端に限定され、カンバスを空白が満たす。描かれ

ている部分は空白を引き立て、互いに響き合っている。鑑賞者はその上を歩き、空間全体へと広がる。新作の「対話」ウォールペインティングでは、モノトーンのグラデーションが直接壁に描かれる。作品と空間との共鳴はスケールを増している。

李の作品は彫刻においても絵画においても、作ることと描かないこと、描くことと描かないこと、関係性で成り立つ。表現しようとする求めているものが「無限の概念だ。初期の絵画作品が示すように「最初は繰り返しの中間に見てきた」(李)が、「有限な人が絶えず変化するものにタッチするときに、無限が生まれる」ことに気付いたという。

方丈記の「行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず」の二語が頭に浮かぶ。作品は自然のようにそこにあるが、周囲にはそこはかとない無常観が漂う。

近作の「関係項一鏡の道」では、鏡面仕上げの

1936年韓国に生まれる李は56年に来日後、もともとは文学を志したが、結局、美術の道に進んだ。結句、美術の道に進んだが「一瞬見て終わってしまふ文学のように深みがない。美術家であることがずっと恥ずかしかった」(李)という。

品質本位の茶づくり



全国・関西茶品評会第1位
京都府宇治市小倉町寺内86
自園出品茶大臣賞31回受賞
0774-20-0909

寺山園

李禹煥回顧展 きょう開幕 兵庫県立美術館

日仏を拠点に世界的に活躍する韓国出身の現代美術家、李禹煥さん(86)の回顧展(朝日新聞社など主催)が、13日から神戸市中央区の兵庫県立美術館で始まる。12日に内覧会があり、彫刻や絵画などの代表作約50点が公開された。

李さんは、自然や人工の素材を組み合わせ、モノの存在や関係性を問う「もの派」を代表する美術家。「人間が、もう少し他者や自然など外部と共存して生きていくヒントになると同時に、周辺が持つパワーを感じ、芸術のありようを楽しんでもらえれば」と話す。

来年2月12日まで。月曜と12月31日、1月2

日、10日は休館(1月

9日は開館)。一般1

600円など。詳細は

展覧会公式サイト(

<https://leufan.exhibit.jp/>)、問い合

わせは同館(078・

262・1011)。

12月13日

渡義人

